

第34回 日本小児放射線学会 「教育講演」より

Hirschsprung病類縁疾患の病態と診断・治療

豊坂昭弘 兵庫医科大学 第一外科

Pseudo-Hirschsprung's Disease
-The pathophysiology, diagnosis and treatment-

Akihiro Toyosaka

1st Department of Surgery, Hyogo College of Medicine

Abstract Pseudo-Hirschsprung's disease is defined as congenital motor dysfunction of the intestinal tract resembling Hirschsprung's disease, but harbouring intramural ganglion cells as far as the terminal rectum.

Symptons of this disease are mainly related to non-mechanical ileus and manifested in the neonatal period.

The patients were divided into two groups based on the presence of histologic abnormalities in the intramural ganglia. The group with morphologic abnormalities was divided into three groups: that is 1) hypoganglionosis or oligoganglionosis (a reduction in the number of ganglion cells), 2) immature ganglionosis (a reduction in size of ganglion cells), and 3) others (intestinal neuronal dysplasia etc.). In the groups without morphologic abnormalities there were CHPS and MMIHS.

This disease was clinicopathologically investigated concerning age at onset, symptoms, barium enema findings, rectoanal reflex, Ach-E activity, pathology of intramural ganglia, operative precedures, prognosis and nutritional status. In the groups with morphologic abnormalities, most cases had meconium disease-like appearances in the operative findings. The morphologic abnormalities such as hypoganglionosis or immaturity of the myenteric plexus in the intestine seems to be the main etiologic factor in meconium ileus without mucoviscidosis. In most cases impaired intestine extended proximally beyond the colon for a variable distance, and none had an abnormality of a short segment or segmental abnormality. These findings indicate that pseudo-Hirschsprung's disease remains a serious disease of childhood, but immature ganglionosis has a good prognosis due to maturation of the ganglion cells.

Our results indicate that Hirschsprung's disease and pseudo-Hirschsprung's disease with and without morphologic abnormalities of the intramural nervous system can be separated on the basis of Ach-E activity rectoanal reflex, and barium enemia findings.

The detection of c-kit/SCF system and cathepsin D in the gastrointestinal tract may be useful in the diagnosis of pseudo-Hirschsprung's disease.

Key words Pseudo-Hirschsprung's disease, Hypoganglionosis, Immature ganglionosis, Meconium disease

はじめに

壁内神経細胞は直腸末端までみられるが、Hirschsprung病(H病)類似のイレウス症状を示し、先天的な主として下部消化管の運動機能異常を示す疾患に対し、H病類縁疾患または類似疾患pseudo-Hirschsprung's diseaseとして漠然と呼称され、またHirschsprung's disease and related disorders、Hirschsprung's disease and allied disordersとしてH病との関連の中で報告されてきた「いる」明確に定義されているわけではなく、種々の病因のものが含まれているたけではなく、種々の病因のものが含まれている疾患群として考えられている。その病因・病態に関しては不明の点が多く、分類・名称に関しても一定の統一されたものはない。

我々は以前に全国アンケート調査®を行い, また平成3年~5年に文部省の研究班を組織 し、本疾患群に対する調査・研究を行った®。 本稿では自験例とこれらに基づいて日病類縁疾 患の定義・分類・名称、および診断・治療につ いて述べる。

歴史的事項

1958年, Ravitch¹¹ はH病と異なるが, 原因 不明の日病と類似した機能性腸閉塞疾患群を pseudo-Hirschsprung's diseaseと呼称した. 1965年,英国小児外科学会(BAPS)と米国小児 科学会外科部門の合同セミナー(1966)におい て、pseudo-Hirschsprung's diseaseが採り 上げられ、本疾患群の存在が注目されるように なった. その際, Ehrenpreis²⁾ はH病類縁疾 患を壁内神経細胞の異常のある群, 異常のない 群、および原因が他に明確な二次的な腸閉塞の 3つに分類している。壁内神経細胞に異常のあ る群に関しては、Bentlety®が神経細胞の少な いものをhypoganglionosis, Spencer⁴⁾が神 経細胞の未熟性のあるものをimmaturity of ganglion cellsとして報告している. しかし, BentleyおよびSpencerの報告とも新生児の機 能性の腸閉塞疾患に対し, 直腸生検やrectal myectomyから診断した直腸に限局するshort segmentの症例である。内括約筋部の少しの組織所見からの診断で、また部位的にもその質的または量的診断が困難な部位であり、その診断は極めて疑わしい。現在、後述する理由から sigmoid colon以下rectumに限局するような short segmentの hypoganglionosis や immaturity of ganglion cellsの存在の報告には 大いに疑問に思っている。

hypoganglionosisに関しては、H病解明の 当初から、aganglionic segmentの口側には 正常腸管との間に移行帯が存在し、hypoganglionicを呈することが知られていた。 1970年、Meier-Ruge®はhypoganglionosis を"Hypoganglionare Megakolon"として 報告し"Morbus Hirschsprung"病として報 告している。この報告もaganglionosisの口側 に続くhypoganglionic segmentを強調した 報告で、hypoganglionosis単独の症例ではな い。

純粋なhypoganglionosisの報告は、1964年の石田らの報告が最初と思われる。壁内神経細胞の広範囲の著しい減少例で、先天性壁内神経欠乏症 congenital oligoganglionosis of the intestineの名称で報告されている。岡本はH病の病因の研究から、小児の機能性腸閉塞疾患のなかに、広範囲に壁内神経系に未熟性の存在するものがあることを認め、immaturity of gangliaとした。

宗像¹⁰ は壁内神経細胞が広範囲に減少を示す ものを壁内神経低形成hypogenesis of gangliaとし、大腸下部で限局したshort segment の神経細胞の減少を見るものをhypoganglionosisとして異なった定義で報告してい る.

1987年,第24回日本小児外科学会(岡本会長)でH病類縁疾患が初めてメインテーマとして採り上げられ,その際,我々は全国アンケート調査を行い¹¹¹,学会での発表内容をまとめて後に単行本として出版した⁵¹.その中で,我々は壁内神経細胞の数はあるが著しい未熟性のみを呈

するimmaturity of gangliaが存在することを報告し、これはRickhamやClatworthyのいうmeconium disease、またはmeconiumileus without mucoviscidosisと同一の疾患で、両者はほぼ表裏一体の関係にあることを報告した120.

一方近年、ヨーロッパ学派からは逆に神経系の増生例の報告があり、intestinal neuronal dysplasia (IND)が報告されている¹³.

定義・分類

日病類縁疾患とは前述した如くaganglionosisではないが小児の先天的な主として下部消化管の運動機能異常, すなわち機能性腸閉塞症状を呈する疾患に対し, 漠然と言及されてきたようである^{1~4)}.

我々はH病類縁疾患の定義としては,以下のように考えて,分類している.

- 定義: 1. 壁内神経細胞は直腸末端まで存在 する
 - 2. 先天性のH病に類似した主として 下部消化管の運動機能異常, 即ち 機能性腸閉塞症状を呈する疾患

として、他に原因が明確な2次的に発症する腸 閉塞疾患や単なる慢性便秘症は除外している.

日病類縁疾患の分類に関しては種々の病因のものが含まれていると考えられるが、壁内神経細胞は存在しても、(A)壁内神経系に病理形態的に異常を認める群と、(B)壁内神経系には通常の検索では異常の認められない群、の2つに大きく分類している。このなかで、壁内神経系に形態的異常を認める群を日病類縁疾患とするのが日病の病態から考えて自然な分類のように考えられ、壁内神経系に異常のみられない群は成人でもみられ、日病類縁疾患に加えることには異論があろう。しかし両群とも臨床症状は極めて類似し、鑑別診断上も極めて重要であるので、壁内神経系に異常のない群をも広義の日病類縁疾患に含めて分類しているもの。

壁内神経系の異常群では、壁内神経細胞減少症(神経細胞の数の減少をみるもの)hypo-

ganglionosis (oligoganglionosis) (Fig.1), 壁内神経未熟症(壁内神経細胞の未熟性を示す もの) immature ganglionosis (Fig.2), お よびその他の3つに分類している. 壁内神経細 胞の減少と未熟性の両方をもつ壁内神経叢の低 形成100 hypogenesis of gangliaについては, 減少症の新生児期での一病態を示すもので, 我々は減少症と同一の病態と考えている. すな わち, 減少例では新生児期での検索例では全例 神経細胞は未熟性を呈し、また神経細胞が減少 すれば神経叢は低形成を示すのは当然で, 低形 成のない減少症は存在しないと考えられる. そ れ故、低形成hypogenesisという言葉は病態と しては理解されるが、別個に分類する必要はな いと考えている. 壁内神経系の形態的(-)群に ついては、慢性特発性偽性腸閉塞症chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction (CIIPS)¹⁰と巨大膀胱・狭小大腸・腸管蠕動不 全症候群(MMIHS)15)が代表である.

以上の分類についてはTable 1 に, 班会議での本疾患の集積症例をTable 2 に示す.

病因・病態および病理

H病類縁疾患の中で、壁内神経細胞の著しい未熟性を示すものを壁内神経未熟症immature ganglionosisとし、この疾患はRickhamやClatworthyのいうmeconium diseaseまたはmeconium ileus without mucoviscidosisと同一の疾患で、両者はほぼ表裏一体の関係にあることを当初報告した^{6,12)} (Fig.3). その後、壁内神経減少症hypoganglionosisでもmeconium disease様所見を高率にみることから、meconium disease様所見は胎生期の腸管の広範囲の運動機能障害に起因するH病類縁疾患の普遍的な肉眼所見ではないかと考えている⁷⁾.

すなわち,この病態は小腸に及ぶ広範囲の壁 内神経細胞の未熟,または著しい減少等により 腸管全体の蠕動機能が弱く,このため流動的な 腸管内容は小腸下部近くまで通過しうるが,腸 管内の通過時間が長く,このため小腸での水分 の吸収が多くなり、胎便の固形化が小腸内で起こり、下部小腸ではこの先進部が粘着・固形化し、胎便の栓塞が惹起されるものと考えている。すなわち、本症の弱い腸管の蠕動力では、回腸で固形化した胎便を回盲弁のbarrierを越えて大腸へ移送する蠕動力がないため、回腸に胎便の栓塞を生ずるというのが本症の病態で、本症

で通常の腸閉塞と異なり、鏡面像を呈しにくいのは腸管の吸収力が維持されているためと考えている(Fig.3,4).

胎便による腸閉塞は、meconium wormや meconium plug syndromeのように結腸でも みられる. これは、神経細胞のimmaturityの 程度の軽いものでは回盲弁を越えて結腸までの

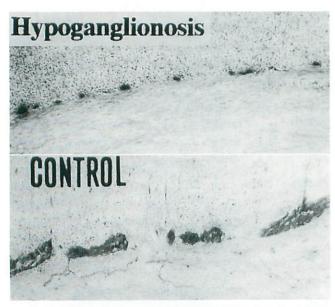


Fig.1

Comparison of the histology of Auerbach's plexus in the ileum of a patient with hypoganglionosis and a newborn control.

The area of Auerbach's plexus is very small compared with newborn control.

(Ach-E stain, original magnification × 40)

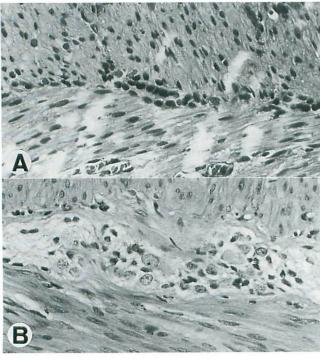


Fig.2

Comparison of the histology of Auerbach's plexus in the ileum of a patient with immature ganglionosis(A) and a newborn control (B).

The number of ganglion cells is sufficiently seen, but the size of ganglion cells is very small compared with newborn controls.

(H&E stain, original magnification × 200)

胎便の通過があってもよい. 小腸または結腸での胎便による腸閉塞の病態の差異は神経細胞のimmaturityの程度によるものではないかと推測している.

新生児期に一過性の腸閉塞症がある。このような疾患の中にはshort症例の未熟症の報告があるが、これに関しては、直腸等に限局するのではなく、下部消化管のかなりの範囲に壁内神経系の未熟症があり、これにより消化管の運動機能異常を惹起する可能性はある。しかしこの場合、meconium diseaseやmeconium plug syndromeに比し、神経細胞の未熟性の程度が更に軽いものではないかと考えている。

未熟群や減少群に班内症例で少数直腸等に限

局するshortの症例がみられた. shortの症例はすべてrectal biopsyからの所見で,他の未熟群や減少群と病態がかなり異なっており,short症例で真にH病類縁疾患が惹起するのか大いに疑問があり,今後更に検討していく問題であろう.

欧米に多くみられるmeconium ileus with mucoviscidosisでのmeconium ileusの病因については、cystic fibrosisに起因する胎便の粘着性から説明されている。しかし、胎便による閉塞の病態が真に胎便の粘稠性によるかどうかは必ずしも明確ではない。"without mucoviscidosis"の例でも著しく胎便は粘稠である。meconium ileus with mucoviscidosisも、

Table 1 The classification of pseudo-Hirschsprung's disease

- A. Intramural nervous system morphologic abnormality (+) group
 - 1. a reduction in the number of ganglion cells
 -hypoganglionosis (oligoganglionosis)
 - 2. a reduction in the size of ganglion cells
 -immature ganglionosis
 - 3. othersintestinal neuronal dysplasia (IND) segmental abnormality etc.
- B. Intramural nervous system morphologic abnormality (-) group
 - 1. chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction (CIIPS)
 - 2. megacystis-microcolon-intestinal hypoperistalsis syndrome (MMIHS)
 - 3. others

Table 2 Results of Pseudo-Hirschsprung's Disease Study Group in Japan*

No. of institution: 37 institutions Total no. of cases: 130 cases Intramural nervous system morphologic abnormality (+) group: 75 cases Immature ganglionosis 26 Hypoganglionosis 25 Immature ganglionosis + Hypoganglionosis 19 Intramural nervous system morphologic abnormality (-) group: 38 cases CHP MMIHS 9 5 Others Unknown (meconium disease) 6 cases Others 11 cases

^{*}Co-operative Research (A)(No.03304037) Ministry of Education, Science and Culture of Japan (1991-1993)

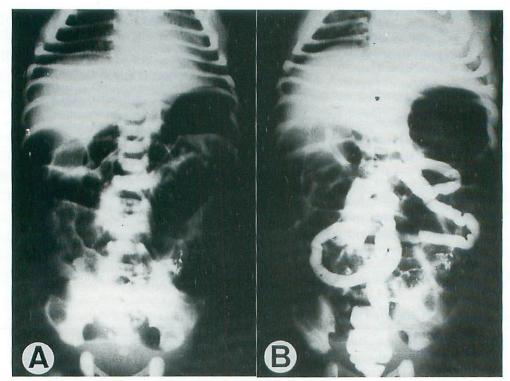


Fig.3 Radiographic findings of a patient with meconium disease. The pathology of this meconium disease showed immature ganglionosis. The plain X-ray (A) shows a large amount of gas in the small intestine with no mirror image.

The enema finding shows a microcolon (B).

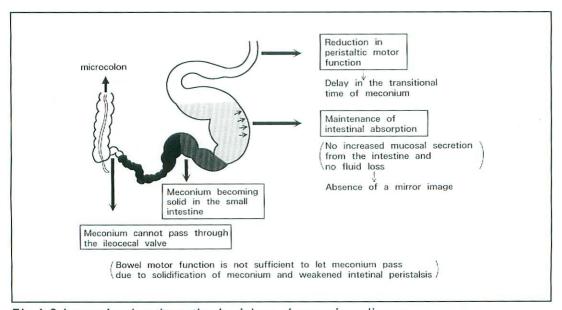


Fig.4 Schema showing the pathophysiology of meconium disease.

The primary pathology is immaturity of intramural ganglia or hypoganglionosis.

壁内神経系の異常に起因する可能性は否定しえない。本邦では極めてまれであり、検索する機会がほとんどなく欧米で研究するしかないが、"without mucoviscidosis"の症例の壁内神経系の検索は是非したいものだと思っている。

日病類縁疾患の病因に関しては不明の点が多 い、H病の病因が最近 Ret遺伝子(**) やEndothelin receptor遺伝子180 のノックアウトマウ スにより無神経節腸管が発生することから,こ れらの遺伝子が神経細胞の発生、分化・遊走に 重要な役割をもつことが報告された. 日病類縁 疾患の壁内神経系の形態的異常群でも同様の遺 伝子異常の可能性が考えられる. 一方, 壁内神 経系に異常のみられないCIIPSやMMIHS等の 病因は全く不明のままであった. 最近, 腸管の 蠕動運動にはAuerbach神経叢周囲に存在する c-kit陽性のCajalのinterstitial cellが腸管蠕 動のpace makerの働きがあるとの報告19 があ り、CIIPS等ではこのCajalのinterstitial cell の減少や分布異常があるとの報告200 があり、注 目されている.

1. 壁内神経系形態的異常群(+)

1) 壁内神経細胞減少症

新生児期に検索された本症の腸管では神経細胞は著しく減少すると共に未熟性も示すため、神経叢の形成は著しく不良で低形成hypogenesisを示し、当初はaganglionosisと診断されることも少なくない。しかし1歳以上になると、神経細胞では数の増加がみられないが、成熟化がみられ、神経細胞の減少のみの形態を示し、hypoganglionosisの像を示す。すなわち、hypoganglionosisとhypogenesisは壁内神経減少症における検索時期の病態の差異に過ぎないと考えられる。

この神経細胞減少群の病変範囲であるが、研究班症例では大部分は広範囲の例であり、また自験例ではすべて全結腸以上で、大部分は小腸の広範囲に及んでおり、大腸下部に限局するようなshort segmentの例はみていない.

班会議や全国アンケート調査^{6,7)} ではshort

segmentの報告がある。しかしこれらの報告は直腸生検からの報告で、病理学的に量的・質的な診断には不適な部位であり、その診断は極めて疑わしい。予後も通常の減少症と大きく異なっている。

また減少の程度であるが、自験例では全例班会議の例でも大部部分は1/5以下の著しい減少で、一般的には1/10程度の著しい減少程度を示した。即ち、本症では病変の程度と病変の範囲が両方ともが著しく、これによりはじめて症状が発現すると思われ、少々の減少(1/3以下程度)では症状を示さないと考えられる。以上からshort segmentの限局したhypoganglionosisの存在には大いに疑問である。

班会議症例でも、減少群と減少+未熟群は減少群の中のshortの症例を除くと両者は極めて類似した病態を示したことから、両者は同じcategoryに分類するのが妥当と考えられた。種々の神経組織の免疫染色での発現は低く、Auerbach神経叢およびその周囲のc-kit免疫染色での発現も低い(Fig.5)。

2) 壁内神経細胞未熟群

Rickham やClatworthyのいう, いわゆる 予後良好なmeconium ileus without mucoviscidosis, meconium diseaseの病因は, 神 経細胞の著しい未熟性に起因することを我々は 報告してきた^{13,14)}. 今回の班研究の調査成績で もこれを十分裏づける結果であった.

本症におけるこの壁内神経の未熟性は、切除腸管からの検索では狭小部腸管のみならず口側の拡張腸管にも及んでおり、本症の病態は小腸の広範囲に及ぶ壁内神経細胞の未熟性に起因することが示唆された。Auerbach神経叢において、減少症と比し、c-kit/SCF(stem cell factor)の免疫染色の十分な発現がみられる(Fig.6)、神経細胞でのCathepsin Dの発現は低いが、成熟化すると十分な発現がみられる(Fig.7)。

壁内神経細胞の未熟性のみを示し、数は十分 ある本症では、時間の経過とともに神経細胞の 成熟化を示し、臨床的にも蠕動機能の正常化が みられ、予後は良好であった.

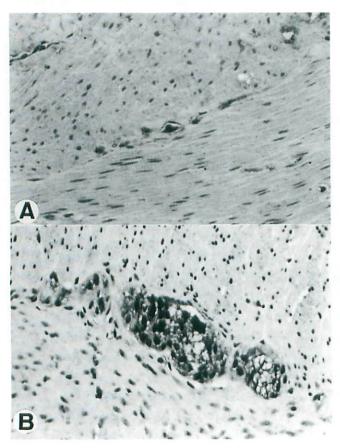
3) その他

形態的異常群で、壁内神経系の増生、過形成 または異形成をみるという報告があり、これを neuronal intestinal dysplasia (NID), intestinal neuronal dysplasia (IND), hyperganglionosis等と呼称されている15). 壁内神 経叢の神経線維の肥大や神経細胞の巨大化や異 所性の神経細胞の存在等が述べられている。 本 邦でも報告があるが、明確な病理所見を示す論 文はみない、NIDに関してはどの部位に、ど の程度の範囲で, どの様な病変があるかかなり 不明確で, 疑問点が多く今後更に検討されるべ きであろう。また、segmentalに壁内神経細 胞の減少例や欠如例の存在の報告が稀にされて いるが、明確な病理の報告はみられず、研究班 では成人例で二次的な病因によると思われる例 が報告されたが、小児例での報告はなかった.

2. 壁内神経系の形態的異常 (-) 群

CIIPSとMMIHSの比較では、CIIPSは乳児 期以降成人でも発症例が多いが、MMIHSでは 新生児に多く、出生早期から発症し、早期に死 亡する例が多く予後は著しく不良である. CI-IPSでも巨大膀胱を示す例も少なくなく, また CIIPSでも新生児期ではmicrocolonを呈する ことが多く、またMMIHSでも新生児期以降の ものではmegacolonを示すことが多い、CI-IPSとMMIHSは単に時期の差異に過ぎないと の意見があったが、本研究からは、両者には運 動機能異常の程度の差によるのではないかと示 唆された、すなわち、MMIHSの方が程度が強 く,このため新生児期早期から発症し,両者の 病態の差異が生ずるのではないかと考えられ, 両者は同一の疾患の可能性がある.

CIIPSでc-kit陽性のCajalの細胞の減少が言 及されている²⁰⁾が、我々の検索ではc-kit及び



Photomicrographs of ileum from hypoganglionosis stained with ckit antibodies.

Expression of c-kit in the intramuscular area is remarkably reduced in the hypoganglionosis(A) compared with newborn control (B). The differentiation and development of intramural ganglia may be in harmony with that of c-kit positive interstitial cells of Cajal.

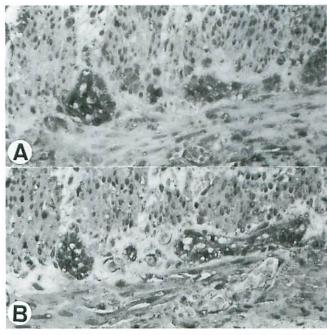
(original magnification × 400)

NO産生に関しては異常を認めていない(Fig.8).

診断

前項の班会議集積症例,以前の全国調査及び 自験例からH病類縁疾患群の診断についてH病 と比較し,腸切除前の鑑別診断を一応まとめて みた.これらの診断については注腸透視,直腸 肛門反射,直腸粘膜のAch-E活性から大略の 鑑別は可能と考えられる.

まずAch-E活性で、その活性が増強がみられたらH病で、H病類縁疾患群、即ち壁内神経(+)群では増強例は一応ないと考えている。 H病類縁疾患で増強例の報告が少数報告があるが、それらの標本を観察しえた限りでは、H病



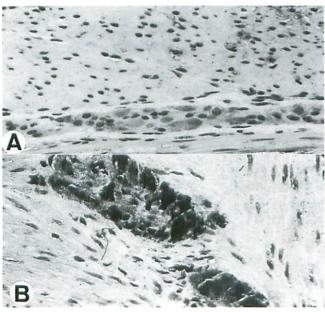


Fig.6

Micrographs of serial sections ileum from immature ganglionosis stained with c-kit antibodies (A), and stained with SCF antibodies(B).

Note intensive activity of both the c-kit and SCF positive cells in the myenteric plexus. This indicate a possibility of c-kit/SCF interaction system.

(original magnification × 400)

Fig.

Photomicrographs of Auerbach's plexus in the ileum of the newborn(A) and 4 months of age after the initial operation from(B) immature ganglionosis stained with cathepsin D.

Expression of cathepsin D is remarkably increased in the older age period (B) compared with the newborn period (A).

(original magnification × 400)

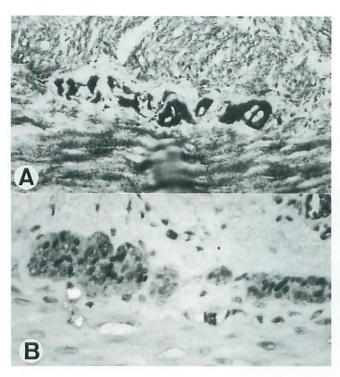


Fig.8

Photomicrographs of Auerbach's plexus in the ileum from CIIPS stained with NADPH dehydrogenase(A) and c-kit antibodies(B). In this case NO production is sufficiently observed in Auerbach's plexus and immunoreactive expression of c-kit is normally noted.

(original magnification × 400)

の増強とは異なり、すべて正常範囲内であり、 我々はH病類縁疾患では増強例をみていない.

直腸肛門反射であるが、壁内神経細胞の異常群のうち、未熟症では新生児期では陰性や非定型patternをみることが多いが、経時的に陽性化し、数カ月後には全例陽性化する。一方減少症では大部分は陰性であり、経時的にみても陽性化することは少なく、あっても非定型的なことが多い。この点は未熟症とかなり異なっている。壁内神経系に異常のないものでは、一応反射は陽性と考えてよい。陰性のものが少数あるが、これは新生児期に測定されて判定しにくかった面が考えられる。

次に注腸造影であるが、一般に新生児期と乳児期以降では変化がみられる。壁内神経系の異常群の中で、減少症と未熟症は共に新生児期ではmicrocolon~small colonを呈しているが、腸瘻作成にもよるが、経時的に変化し、減少症では乳児期以降では一般にmegacolonを呈し、未熟症ではnormo-sized colonを呈する。一方、壁内神経系に異常のない群のCIIPS、

MMIHSでも新生児期では、microcolon~small colonを呈し、CIIPSでは乳児期以降では、一般に megacolonに変化している. MMIHSでは早期に死亡する例が多く、乳児期以降の例での報告は少ないが、報告された例ではmegacolonに変化しているようである.

以上日病類縁疾患の病態像をまとめると、一般的には新生児期から機能性腸閉塞症を示すことが多く、新生児期の注腸でmicrocolon~small colonを示し、Ach-E活性に増強はみられない。直腸肛門反射の有無や、その経時的変化、更に臨床経過から疾患群間の大略の鑑別が可能である(Table 3).

以上の臨床診断に加え、最終的には分類の項で述べているような病理学的所見から診断される. 正確な病理診断には、2 cm以上の腸管の標本は必要である.

以上述べた診断については、我々の主観も入っており、必ずしも確定されたものではない。 今後、NIDも含め更なる検討が必要である。

		Pseudo-Hirschsprung's diseas				
	Hirschsprung's disease	Morphologic abnormalities of intramural ganglia (+)			Morphologic abnormalities (—)	
		Reduced number	Reduced size	Hyperplasia?	CIIPS	MMIHS
Enhanced Ach-E activity on rectal biopsy	(+)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Rectoanal reflex	(-)	(−)~atypical	Newborn: $(-)\sim(+)$ Infant: $(+)$	(+)	(+)	(+)
Barium enema	Megacolon with narrow segment of anal side	New-: Microcolon, born small colon	New-: Microcolon, born small colon	Megacolon?	New-: Microcolon born	New-: Microcolon born
		Infant : Megacolon	Infant:Normo-sized colon		Infant : Megacolon	Infant : Megacolon?
Aetiology/pathology	Aganglionosis in anal side intestines	Hypoganglionosis (oligoganglionosis)	Immature ganglionosis (immaturity of ganglia)	Neuronal intestinal dysplasia	Unknown	
Abnormal segment	Short in most cases	Long in most cases (often extending proximally beyond colon)		Short segment?	Unknown	

Table 3 Differential diagnosis of congenital intestinal motor dysfunction (pseudo-Hirschsprung's disease)

Ach-E. acetylcholine esterase.

治 療

日病類縁疾患群の病態及び診断が少しは明らかとなってきたが、未だ不明の点も多く、治療に至っては一層不明のことが多いが、一応これまでの知見から治療方針の概略をまとめてみた.

1. 壁内神経細胞未熟症

新生児期の機能性腸閉塞で、注腸でmicrocolon~small colonを呈しAch-E活性は増強なくメコニウム排泄がなければ本症が疑われる。ガストログラフィンによる注腸で、メコニウムの排泄が無く、イレウスが改善しなければ開腹する。本症ではmeconium disease様形態を呈しており、拡張した回腸に2連続式回腸瘻を造設するのがbetterと思われる。回腸瘻造設の際、十分な組織標本を切除し、病理学的に診断を確定する。本症なら経時的に回腸瘻からの排便が良好となり経口摂取も十分となり、通常2~3ヵ月後には腸瘻を閉鎖する。

2. 壁内神経細胞減少症

当初の病態は未熟症と類似している. 開腹して拡張した小腸に腸瘻を造設する. その際の病理標本で診断を確定する. 本症では, 通常小腸瘻を造設しても排便状態が不良なことが多く,経口摂取も不能なことが多い.

本症はH病類縁疾患の中核となる疾患で,治療は極めて困難を極める. 基本的には

- 1)まず十分排便が得られる部位に小腸瘻を作成する。これには病理所見と腸透視所見や肉 眼形態を参考にする。
- 2) すぐには腸切除や根治的切除は行わず, 1 歳以上は腸運動機能を十分に観察すべきである。
- 3) 本症にはMartin法や木村氏法の小腸と結腸との側々吻合術式は慎重でありたい. むしろ腸瘻からの排出が良ければ下位の腸に腸瘻を移し変える方がbetterである.
- 4)人工肛門や回腸瘻の下位の腸瘻で排便状態が良好で、かつ経口摂取が十分なら、根治的手術が可能と思われるが、本症に根治的手術ができる症例は少ない.

3. 壁内神経系に異常の認められない群

CIIPSやMMIHSに対しては外科的な根治的治療はない。本疾患群に対しては手術はできるだけ避け,保存的治療で観察すべきと言われる。一度手術すると手術による癒着で腸閉塞を悪化させる危険が大きいからである。イレウスが強い時や、または経腸栄養のために胃瘻、小腸瘻や人工肛門が造設されることがある。

以上,壁内神経細胞減少群,壁内神経に異常のみられないCIIPS, MMIHSの治療は今後の大きな課題である.

おわりに

H病類縁疾患の定義・分類,病態および診断

・治療について述べた.

本症は診断上の問題点として日病の如く単に神経細胞の有無だけでは判定できず,壁内神経系の異常を量的・質的な尺度で判定する必要がある. 形態的異常があってもその程度によっては機能的には異常を示さないものもあり,今後どの程度の形態的異常があれば機能的異常を惹起するか明確にしていく必要があろう.

本症の壁内神経系の異常に関しては、今後神経細胞の胎生期での発生・分化機構の解明が必要である。最近、neural crestの分化、発達、遊走にはRet遺伝子やEndothelin B-receptor遺伝子やc-kit遺伝子の関与が指摘されており、この面からの追求にも興味たれる。

●文献

- 1) Ravitch MM: Pseudo-Hirschsprung's disease. Ann. Surg. 1958; 147: 781.
- 2) Ehrenpreis T: Some newer aspects on Hirschsprung's disease and allied disorders. J. Pediatr. Surg. 1966; 1:329-337.
- 3) Bentley JFR: Seminar on pseudo-Hirschsprung's disease and related disorders. Posterior excisional anorectal myectomy in management of chronic accumulation. Arch. Dis. Childh 1966; 41: 144-149.
- 4) Spencer B: Problems in rectal biopsy due to immaturity of ganglion cells, in seminar on Pseudo-Hirschsprung's disease. Arch. Dis. Child 1966; 41:143.
- 5) Smith B: Pre and postnatal development of the ganglion cells of the rectum and its surgical implications. J.Pediatr.Surg 1968; 3:386-391.
- 6) 岡本英三: Hirschsprung病類縁疾患. pp.1 196,(岡本英三監修,鈴木宏志・豊坂昭弘編集)祥文社,神戸. 1988.
- 7) 岡本英三監,豊坂昭弘編: Hirschsprung病 類縁疾患-病態解明と診断・治療の研究. pp. 1-226,永井書店. 1996.
- Meier-Ruge W, Morger, R & Rehbein F: Das Hypoganglionare Megacolonals Begleitkrankheit bei Morbus Hirschsprung.
 Kinderchir.Band 8, Heft 1970; 8: 254 – 264.
- 9) 石田正統, 斎藤純夫, 沢口重徳, 他:先天性 腸管神経節細胞欠乏症. 手術 1964; 18:536 -540.

- 10) 宗像敬明, 菊岡 理, 東 義治, 他: 腸管内 神経節細胞異常の病理と臨床. 小児外科 1977; 9:917-932.
- 11) Toyosaka A, Okamoto E, Okasora T, et al: Clinical laboratory and prognostic features of congenital large intestinal motor dysfunction (pseudo-Hirschsprung's disease). Clinical Autonomic Research 1993: 3: 243-248.
- 12) Toyosaka A, Tomimoto Y, Nose K, et al: Immaturity of the myenteric plexus is the aetiology of meconium ileus without mucoviscidosis: A histopathologic study. Clinical Autonomic Research 1994; 4:175-184.
- 13) Puri P, Lake BD, Nixon HH, et al: Neuronal colonic dysplasia: an unusual association of Hirschsprung's disease. J. Pediatr. Surg. 1977; 12:681-685.
- Maldonado JE, Gregg JA, Green PA, et al: Chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction. Am. J. Med. 1970; 49: 203 212.
- 15) Puri P, Lake BD, Gorman F, et al: Megacystis-microcolon-intestinal hypoperistalsis syndrome: a visceral myopathy. J. Pediatr. Surg. 1983; 18:64-69.
- 16) Berdon WE, Barker DH, Blanc WA, et al: Megacystis-microcolon-intestinal hypoperistalsis syndrome: a few causes of intestinal obstruction in the newborn. Report of radiologic findings in five newborn girls. AJR 1976; 126: 957-964.
- 17) Schuchardt A, D'Agati V, Larsson-Blomberg L, et al : Defects in the kidney and enteric nervous system of mice lacking the tyrosine kinase receptor Ret. Nature 1994; 267: 380-383.
- 18) Hosoda K, Hammer RE, Richardson JA: Targeted and natural (piebald-lethal) mutations of endothelin-B receptor gene produce megacolon associated with spotted coat color in mice. Cell 1994; 79: 1267-1276.
- 19) Romert P, Mikkelsen HB: C-kit immunoreactive interstitial cells of Cajal in the human small and large intestine. Histochem.Cell Biol. 1998; 109: 195-202.
- 20) Isozaki K, Hirota S, Miyagawa J, et al: Deficiency of c-kit cell in patients with a myopathic form of chronic idiopathic intestinal pseudo-obstruction. Am.J. Gastroenterol 1997; 92: 332-334.